こまちをどり 三 秋 下

別 3
3
5

ガラス使用

秋

初秋（はつあき）
七夕
生身玉（いきみだま）
躍（をどり）
虫
芭蕉（ばせを）
蘭（らん）
木槿（むくげ）
色鳥（いろどり）
正木散（まさきちる）

文月（ふづき）
残暑（ざんしよ）
玉祭（たままつり）
相撲（すまふ）
鶉（うづら）
荻（をぎ）
女郎花（をみなへし）
烟草（たばこ）
小鷹（こたか）
芋（いも）

一葉（ひとは）
秋扇（あきあふぎ）
燈籠（とうろう）
稲妻（いなづま）
露（つゆ）
萩（はぎ）
刈萱（かるかや）
花野（はなの）
崩簗（くづれやな）
鮭（さけ）

桐（きり）
秋螢（あきほたる）
花火（はなび）
鹿（しか）
霧（きり）
薄（すすき）
槿（あさがほ）
鴫（しぎ）
蔦（つた）
月

俳諧書画精舎鑒蔵 荻原乙彦記

鳩巣文庫

ふ.632

帝國圖書館

ガラス使用

名月
碪
野山色
秋田

九月十三夜
菌
重陽
九月盡

駒迎
楓
紅葉鮒
雜秋

雁
紅葉
木實

小町躍第三

秋

初秋

秋来ぬと吹風音や名對面　徳元

涼しさハ見や秋そ川風ふくろ　良春

風乃行の柳くろれ見や秋の色　重次

す風や己鶴立秋乃露もろし　光重

問りみれと風受けるやと鶴の秋　安知

音さへやそよ秋風の荻と未ち　知徳

秋ハ今川よここ渡りゆく嵐の帆　清等

鶯の音さへいやか也吹穂乃風　重れ

さつ風や吹こそ秋乃風の聲　縁督
萬水や一露にしる紅と絹乃秋　方孝
金剛の西瓜なれや嫁の風　宗盛
追善
あらしは業常の風かけきぬ秋　知覚
井戸水のうるけれちるやきさぬ秋　秋月
立秋は縁日ならまじや風乃科　通耕
荻のこゑやそよぐや御用も嫁の風　季吟
今ぞ立や六千余世あかき鳴　三信
秋口といふまりてや風の聲　正貫
嫁来ぬと風の移代もかくしうり　村後
舟哥も聲は帆小こそ秋の風　如自

方角や宅にしらしる秋の坊　親元
かしこ風もなるふ立来るや秋津嶋　加友
萬須乃霧ふつまさら白露の秋　常辰
白露にぬれひそこぬひの嫁乃風　良元
何とよてこ忘るり世の穐の世　同
小つまねとても鎚はくるよ秋の風　友貞
千里とぶ鳥の一羽の嫁の坊　同
あやをりなしに立る紅秋の風　同
秋来ぬと世り平絹や風はしる　定親
風の手にふれつき立の白露の秋　好孚
其風の四方乃名のこれぞふの雄　同

衣路吹ハ綾の衣しきゝ秋の風　政之
涼風やけふハたちまち秋の色　立圃

文月

秋来ぬと世にしらせ状乃文月哉　弘永
文月状かへしにあひする夜更けれ　幸和
文月にかくされぬ雲やよ所の月　知徳
無筆にも拝見するや文月夜　道淳
くつとくむる文月のひかりかな　良徳
文月の影とうつすや丸硯　吉泰
文月ハよむ秋風のたよりかな　宗言
文月やむかしもむかし七夕の露　友貞
文月ハ文字の窓乃ながめかれ　好与
秋風のはしそへつゝ文月夜　順三
文月に数の小書や天津星　昌房
文月やわさと一筆そへよ乃秋　立圃

一葉　付柳散

一葉にも音信や秋の始　一正
櫓櫂なくて一葉や風にまかせ舟　重方
一葉乃舟寄なまるや萩の上　頼富
宇治川にうかふ一葉ハ茶船かな　文川

一葉やのけて見る月の秋あらし　宗雅

雄ハ梲柳乃氣力落葉かな　一正

剃刀か柳ありあり秋の色　有哉

一葉の類船なかしる乃月　立圃

桐

一葉ハまり桐壷とくし給ふれ　芳友

桐の葉を汲かへし井戸の水　徳元

井乃ふちにこす桐の一葉かな　守種

梧の葉も踏かへしれ木履かな　成安

とのゝ名のきるてともまつ落葉哉　友貞

七夕

仲人ハ鵲か母かめをとかし　白云

似たものゝ女夫なるや二星　貞徳

七夕のまうけとるまや宵の月　同

たなはたやあふハ縁業と志るゝ天　同

稲妻や七夕のとりあやの紋　宗富

七夕乃寝ものかたりやかりの数　意敬

業するや七日七夜のほしの奇　安静

あふ星や明むけはこよのいと暇乞　善入

毎の夜やさそ山鳥の男七夕　令巾

銀川のよれくあまの淵や星の中　成政

表着や袮うる二川の星まつり　知徳

けふの女ハ仲人をまつし男七夕　久明

ぬきそふに衣やひとつ二川星　信盛

行あひの夜や刈しくと拘くより　重以

菅こもの七ふにぬうや女七夕　定清

和合せしこや陰陽の二川わけし　吉武

あひそめのはすれころや男七夕　正盛

牛ハあまさと歩まりそ引男七夕　保友

糸くりよるおとやこうひ女七夕　直俊

星あひの色をといはまさこうまひうか　河田 宗勝

七夕ノ男星ヲ牽牛ト云フ

七夕ノ女星ヲ織女ト云フ

ひく牛ハ恋の物も荷かたまりさ　可全

彦ほしの別にひくやうしろ髪　同

名よといへしほそ布織や女七夕　重嶺

恨すれ千代紙一夜ろかき川星　常言

あふとわかれ杉もひハ何ぢ二川星　同

あひそめし年やうそへい星乃数　玄礼

松風乃志らへや星より手向琴　定親

七夕や霧に雲れ袖まくら　親十

あかりてや幾代の恋れ哥乃題　同

河よも絶しきあいねもかし紀女夫星　信世

夜三時ひく川水かすうや二川星　和年

ガラス使用

天なくらきまり久し二河かし　同

あはねるや思ひと夜の帰る川星　資方

花さもせぬ袖もせく夜とや女夫星　定用

秋見るくも久しくなりね女夫星　宗雅

梶の葉はうつや色紙のちらし書　好与

川琴は織女流れの秘曲かな　友貞

星とほし和歌をよみさらまほれ　同

言ことをあまは不出織よ星の台　同

七夕の星乃ひかりや糸乃玉　同

琵琶琴やこれも祈りひの糸のふた　常辰

織布も七川に入よ女たなりさ　昌房

秋蛍

秋風身にはや鹿見えする蛍かな　貞室

燈とい文字小ものこる蛍かな　良久

盆過てくさえぬ蛍や佛乃火　安明

生身玉

なくへく親は有までもいきみ玉　昌房

玉祭（付 施餓鬼 送火）

身を捨てうりふ施餓鬼は佛まゝ
ゆく船はかくれてときろ水施餓鬼　信元

菩根のうらかひなきや水施餓鬼　和徳

汲水に数書てとふせりきりか　宗之
秋やうつ露やすゝ玉魂まつり　自笑
萬燈やかゝれる紀玉まつり　木端
下々のはてやむもとひく玉祭　定清
菩薩より挂なる人りもる玉まつり　耕宣
池のわかれ秋こそまされ水せうき　春良
摂待ハなきくむかしなこい茶かれ　一景
精霊ハ冥途かうせんの手向かな　一雪
水玉をともつるや秋の河施餓鬼　徳元
袖よりやかゝるゝ露の玉まつり　利清
花もしね風のたゝひの玉まつり　正重

水をしね中や興乃星まつり　同
かさ川と隔りてあふや天津星　同
星とおしうつるひなつきれかゆかれ　立圃
あふ時のえもねぬ夜いふふ女夫星　同
くもてまうる花やおりひの糸すゝき　同
めぐりあふ星や焦せれ焼おうち　同
逢そめし貞女とやふるなとこ星　同
天川まうしれ恋やよるひほし　同
星あひあふ銀かさしそ河き川　同
むかし男今もあひまり女たなりき　同
七夕をなぐさめやするらん會者定離　同

たなばたの跡のまつりやまた乃書　同

残暑

おもはゆきあつさや灸の火かざし　一日

秋扇

秋来てハ猶しも左のまきりか
風の恩ハわすれとられぬ扇かな　三政
瀧をもせん寝もせくつる扇かな　正盛
手拍子やありしはよきは瀧鼓　親信
秋風の音に横手も紙團かな　宗言

玉まつり念仏も踊拍子かな　家雅
孝行の子こそ宝の玉まつり　未知
聖霊やそれ家々のまつりごと　常辰
送り火やもとよりかへる松が崎　同
聖霊の花むけするや水施餓鬼　昌房
とうろ火や紙より燃えて心が玉まつり　立圃
法花経ありつや志如の玉まつり　同
そなさしき我月かけて玉祭　同

燈籠

冥途へや遠しる寺の揚灯籠　重頼

細たつね竹かあやはう燈籠　重治

とけ法師ハそけもまはり燈籠か　言辰

それとみよ薄まねく人の影燈籠　則友

目にハみえて手にさへられぬ影燈籠　友之

世をかくれたる人も名や揚燈籠　貴

花火（はなび）

竹の筒よりこれも生る花火かな　安利

口薬とハいふとやいへ手花火のわれ　貞仲

夕されと蛍より影ちる火の鄙　重良

筒の中ゟ出る日つかひ花火かな　重良

手にもちにとりくひしくハ花火かな　未安

躍（おどり）

あられしも夜ごとに振やかしけ躍　重頼

手もたゆくなまし次踊の扇かれ　安成

うまやまき絶之人まなぶ踊　重房

口まねはあはむ小町かたとりかな　守長

昔顔ハむかし男か伊勢おどり　信元

いろか世り姉かある小町踊かな　助晋

おやくしれハゆかても小町おどりかれ　慶哉

さまかへて秋もとしよるおどりかな　百之
わする夜はいせ踊せよ月のかげ　直童
かしの名も何はや京も伊勢踊　由的
踊さへにぎはしまる茗すりなくしうかな　正春
めぐりあひのこゑしやそろうて踊けり　春貞
かり初く数珠夜半のたよりかな　同
梅恋や袖をりいのりもらひ躍　方春
まよふみもうくや心乃中踊　常辰
おどれよやあるくすもしら盆の月　嶺利
よきかりやよるがみま〇の一おどり　栄言
秦の世にはじまりあるか馬康踊　智詮

京中のかゝは小町おどりかな　来安
擣らしは月の稱唱にたとへかな　同
廻文のよみもそかいもおどり哉　政之
人ゝ経行ゝ月夜の馬康踊　同
数あまたく人ハよまれぬおどりかな　昌房
いろつくみ我身よりかるおどりかな　同
千代や神代もいふはいせおどり　同
文字の数も神代のまゝ伊勢踊　立圃
すゑもあしも其〇題目におどりかな　同
とまるよハおどりに帰る人ごゝろ　同

相撲

まけらまけい亜と是よる相撲かな　本包
諸ごとハひろくすゝむ人関相撲　後佐
いく破れ人かとうちそ大相撲　氏重
すまちゝと去りしとかせり勝相撲　蒼昌
升つまみねそうるしき負相撲　延世
かけ屋とやいるさられてま素相撲　宗立
うけてたつ人もやいなすき相撲して手　瀧扉
乳とし力はかなしやまけ相撲　重以
わらひをもうけれ情のすまふかな
関相撲とらくなれやあれさら　保友

まれなれと名なりもあつと関相撲　冨長
内まゐ相撲笑ひくたさのさかそり　亜月 重貞
負相撲ましくそれをもらふかな　一亞
ようてこそせまつとしるゝ関相撲
名なりてそ身をそれそれ勝相撲　成政
めうあかのくえしやそれさる相撲取　春良
まつ風なりしやみくかすまふ取　同
るりからゆきの関とある相撲かな　李也
よるへと物かはとかすやまけ相撲　好道
飛まけいうまけるまけつくすまふかな　文索
まけ腕をもとらひ家とり相撲かな　久任

まくらぬぐつとハ左を御上りかな　政之

わハ世ぬハくされしものかり破お襟　昌房

稲妻

いろうきれねよるけんくやよるひ星　良徳

簾

秋簾ハよる琴の竹や想夫恋　宗立

こゝろとハなをゆかしさとや簾のうち　貞徳

耳聞身とりや萩と簾乃うち　重頼

しるとうりきろとハみてね深山され　良景

淋しさや志りのとうれましの彭　康吉

琴の音に似ゆるつやさゝ星秋の簾　兼仙

鉄炮ハ簾絲打おれらうちら那　松久

我うると音とこそ琴のよる丸簾　冨長

ねりり志らもりよる幡音ハ　福田 道軒

小男簾やみもとくこ楽の下紹紫　政之

狩人の孫ハ絲吹としうかな　宗雅

志の人とて簾やむりしとなる丸京　清下

簾の毛も紅紫ゐ深家集穿られ　昌房

虫

武蔵野や吹いかなる風と虫　重頼

ガラス使用

廣庭や五百機をる虫はしゑ　同
潜り耳わりとやなりぬ蛬　垂一
むしの音やちんちろりんは鷹康山　器水
なきことは鬱訴訟やきりぎりす　幸和
貫統りいつまでむしこゝねむし　重以
むえよわやおうう雅東は虫の多　自徳
あすハ咲さを日くらしの虫は秋　幸光
露草も綾合毛なるし鈴むし　應吉
秋風の吹そへつけくるもむしこうれ　安次
鈴むしハ軒乃風鈴か草乃庵　竹大
松むしの音やまん〳〵とまねのえ　素言
新うつし露にを旅人の虫目かな　友貞
虫は宮に入て風鈴乃鈴もるか　政之
鈴虫乃こゑやまつりは鞍馬山　昌房
むしの音や月と花との寺合　立圃
賣よりさ野の松虫やかくし藝　同

鶉

秋の野は多く雲わり鶉かな　素言
合すゝやあつむ毛しになく鶉　嶺利
網の目をたまる鶉乃羽風かな　流味
毛衣や袖ともむすんでかさ鶉　龍之

ガラス使用

露

七宝に玉やまく蓮花乃露
珠数玉か絲の菓に草乃露
みかけとかや本織みかく家露に玉
なき人の玉土産かや袖の露
影丸きさ三ヶ月見るや露に玉
嘗
あつと見しもはかなさの際よ露乃玉
袖ひちくむすひし露や玉たれに
追善
年ゝくれ冬あけするや袖の露
白露や夜ゝにふんまつ如意な玉

吉久　玄札　長吉　光友　元清　宅盛　長式　豪寿 久忠

我うへに露を玉なるか向し
不玉か月秋かくせつ草乃露
追善
見しし夢ハ反魂香か袖に露
月
珠数玉か何そととへは袖の露
玉とるか露や本来無一物
外塩や露も満干に玉津浦
力まか萩かやとくやき袖の露
水入の露やみすゝりと筆乃海
白露やなゝよ八朔に宅の星

玄札　同　常辰　友貞　定親　有哉　玄圃　同

霧

ガラス使用

絶よりは賊となるかや雲の陣　以演

逆浪のむかしくらきの海　定行

堀なくて世界にうつるや雲の海　正重

朝雲り衝の庭まや鶴かくれ　冨長

雲は海み山は浮出す嵐哉　嶺利

夕雲に日や入海の底ひかり　友貞

水練の上手は下りよし雲は海　未安

雲の海は堀干かと鶴の山下風　雪州　統武

行先の鞍るはいつこ雲の陣　立安

立鳥は絲絃濁すや霧は海　清卜

初瀬山雲より薺やかくれ里　同

雲よりかくれん坊の冨士太郎　立圃

山の雪も立とよ紀せの雲は海　同

芭蕉

芭蕉葉は霧み乏る紀乃扇かれ　俱秀

荻

葉は薄字は萩より細く荻ほよ　昌意

秋来ねと業肉するや荻の声　重頼

もし海荻と体慢あふるひかれ芭　同

秋風の定宿なまりや荻の声　貞徳

風ふかぬ時は息込る荻の葉　親信

ガラス使用

さくやくも折れとまみる萩の露　友貞
卑調の局行なかりし萩の下　親十
濱萩やうしろ数あまる松の風　立圃

鴫

夕やすかり枝は寺門の萩ヶ花　宗治
はかむ石ハこうや鉄角鴫鳴草　岸
さよの風小羽ねとたつる小藪かな　玄札
秋草は字とはなき波乃花みたれ　政之
毎夕袖もり觸たれかくるや萩の露　昌房
折とるハ数まもし鴫鳴草　立圃

薄　付尾花

逢そめくくる車かくして糸すゝき
風吹ハみなかゝり袖の尾花かな
ちりる露れむさすひせよ糸まくる紀
ますみうせく風のあや済す尾花かな
乱きまおとし霜れすゝきやたてるかと
秋やまふ路露やまろいれ糸すゝき
白波かとうる狐乃尾としなかな
こゝ川まこハ風次背く糸まくる紀
あひせうん鷺れ羽薄うつる草

清一　一日　成次　信元　政次　重良　保友

とく露の玉や貫丸糸すゝき　道之

縄前りう川やこゝかしこの糸落　太源

錦とる名糸なまめや萩すゝき　是雲

雅あらいや尾花の袖と乱しもの　冨長

一本の落ハ鷺の羽名かれ　立安

あつし野中ら川やせりきの旗薄　定親

かさよろハ風の縁かよいとすゝき　正辰

からろひて廣袖となるおをかな　立圃

蘭

もゝ草になるらしかりて藤袴　康甫

山ハ錦野ハ金蘭の花ゑんか那　弘永

秋の野も云口勅許の蘭之の酒　一日

春日野や花の匂ひも蘭麝待　塵哉

散乱をちらんの花紙ハ読んせよ　備前　貞利

廻文
なかんらし花のその名ハしらんかな　吉里

女郎花

一河く流るハ女気の女郎花　重頼

男山にこしりとをまりやとゝまるへし　定重

青の海の豊玉姫かとみるへし　信元

なとこ山の様進なるらし女郎花　守長

ガラス使用

とく露やおのれくさし女郎花　定行

しほめるハ小町か果をとろへし　昌房

苅萱

かるかやとかりとるへんや無道心　道水

しきくさとかるかやかつる野への花　尚俊

廻文
かるかやハれしミてミしれハやかるか　為門

同
咲花乃かるかやか陰の野まハ草　定行

槿

朝かほやむかし男の哥乃海　定房

卯の刻に咲あさかほや六つの空　俊直

槿やちるもてうつるも花乃えん　吉孝

朝かほやもかねにちらく色の家　嶺利

朝かほや目見えて後いそく日の御親　立圃

木槿

主鳥の羽風に散もむくけかな　好与

あくむか何そとゝへともむくけかな　立圃

秋草

紅葉する蔦やさなからかゝる錦

むさまとこそ見るよ小車の花の露　正甫

とゞめしや秋のひより駒つなぎ　幸以

小車はまはるや手折く人さまに　尚卿

蝶のかや風にあはれる駒つなぎ　信元

見る人もまちせ證なし仙翁花　知德

句紙えゝく咲萩菊や花の縫　愛仙

折やさて清まく萩の花さかり　久翁

わさ萩の袂は異形衣數のかな　可全

萩よやは人にこゝろうつる萩　親宣

うしやうとはよへつき蓮のいろかな　德懐

一滴の露もりそさ川や仙翁花　親信

白髭と一夜り霜やおこる萩　嶺利

秋来くは茶太なうしね蘋もみ　同

棠菊の花火や手川ゞ若狐　同

花野

行人の道草となれむ花かれ　梅盛

花のぬい社ぬ津りね人もなし　意敬

廣き野も一掃薄や花むしろ　光有

風の手の手に草となりすむ花が野　和德

絵にかいて極彩色の花野かな　方孝

廻文
嵯峨の人の花見るよみるは花人の嵯峨　重固

ガラス使用

秋の野や万葉集は作者の種　立圃

花はなく風や小町か歌の姿　同

廻文
さかめしは野に花くはしめかさ　同

月
夜のみは草かくれて花のもと　同

鴫

立かねてはらくしきは羽音かな　章和

脊縫はいつきや鴫の鳥はしら　宗雅

色鳥

翠かゝるともまとかね山路かれ　夢芝

揃なる鶉の目とめて夕かな　重貞

ねまるくらは菊にてこそや羽織の露　松安

滴り来る小鳥やあまに多るのと　宗雅

鳥わたる空や南方山て世界　立圃

小鷹

目の内も涼しかりける小鷹かな　秀重

なりし柴はうまくよすかや小鷹かり　徳元

めくりかはゆくみしやそれ〳〵鷂鷹　春倫

まつ一つひあすよりはふうつる鷹　重定

若鷹紙おとしは小鷹は下とう非

よろこくは罪もつくらし鷹狩め　誉文

棹さしてゐるさへよりへりしゆる　立圃

鳥の子はいつく小鷹の行わかせ　同

崩簗 付 流鮎

瀬は淵に寄れどとろやく川簗　友貞

山里はあさしい鮎の料理かな　信元

蔦

垣に蔦かゝる雨の秋しきり　重頼

廻文
なかさゝさ貫よは木の門さかな　言孝

這蔦にまとはれて松のしみちられ　好与

正木蔓

声すゝやちらつゝ正木の末の葛猿　重庸

芋

墓にしも栽りてしるゝ山の芋　以堂

追善
芋の子もかくやすいさ乃露涙　長屋 依山

掘りにる芋の茎や蓮花ふ

山の芋里まくとゝろもあり　和好

鮭 付 江鮭

よのなかは酔てや赤き醂乃実　徳元
子籠とはいはさしとか越後醂　貞伸
去經はいかに一尺さけの実　智詮
河原と一夜になるや江醂の実　親信

月

月くは雲こそなけれ十八夜　貞徳
梵天乃ゆはり燈籠か空乃月　同
天竺といふもや月の鷺の毛　同
せんどうかうる男か月は舟　同
皆人の詠る孫は丸の秋乃月　同
月と日は須弥乃四州やまはり持　同
月は雲日はめくるは車とけいかな　夢友
月の入天の戸口か額かな　春可
わすれず後はいせ笠きるや空は月　貞一
三界も二階してこそ月見かれ　玄札
月ならはゆくろは雲のおしき哉　幸和
絵ひくや雲間は月の丸ぬけ　同
名や月つきんちんまとる雅家　同
庵まてや日本一乃月夜かな　重頼
山乃端や燈台となる夕月夜　同
白川をかよひし夜舟か空の月　同

月まはみくゝりまねかや中秋夜　同
親ゝの光慈悲は上よりもる月　同
露なまも光りやくもる月かな　同
月のかほ笠ひきのくる風もかな　正重
西へ行月や弘誓のわたし舟　氏重
むさし野ハ大さかつきの光かな　宗朋
三ケ月は海より浮のやかさすし　照屋
いまは地の底より月も出るかな　正友
水は月天地和合のむかしかな　正次
柄のなきあふきといふは月の笠　久家
万灯とりまかす一燈か盆の月　宗後
浪こそては瀞遠なりまや水は月　貞室
西山のおくや月はかくれ里　登云
かさゝれ雲やおほやう月は私　同
上すめ哉下はにごるや水の月　重供
山の字と三川かさゝの月もかな　昌意
闇よりも人のまよふや月の庭　友勝
まん丸な月いまむしさは兎かれ　信全
夜はしの字月いろはのの字哉　弘永
月はひとつ影ハ三千世界かな　同
村雲の袖かうすし望月の顔　後学
越後路や雪にも月は白うさき　伊伯

ガラス使用

ひとんねやうしく鳴か子に玉手箱　静寿

入山乃そゝてや月の鼠泥　重雄

山へ私のわるといつや峯に月　成政

十五夜り半月紙入乃雲の下　知元

空とりやえちか道ふ多の月　意敬

廷うき紙いるとまいうて月に為　玄竹

心ひく二張にちるや水の月　楠氏 正長

廻文
故にこけいさゐんこきい月にりと　孝庸

雨雲ろや望めに月のかくれ蓑　良徳

月ハひとつ乃目や二川こつの燈　貞因

天ふ佳月のうつしやあまり雲　知重

思ひやさよりうつし月に鼠の巣　歩重

月に夜は俗と古家か新法師　同

月影のうつし紙水りこ未うか　一武

仏壇に須弥をめくるや寺に月　惠佐

月のうわや小町かさうめ玉綴り　宗清

空假中紙あるいは月の鏡かな　元知

目ろハみそく月にいとしあるや月に為　清長

懐旧
行人終こうら川よまへ秋の月　知徳

高あるのもとれくそ落かさの月　同

廻文
なのきこけなうよえよりふ月みのりと　同

はさあまるく月おちうてまかり宿の門　信元

犬鳴もとまれぬ月の菴か那　同

有馬にて
入月の跡すみ荒しか地獄谷　同

志ら雲乃衣か月の狗袈裟ゟ　賢清

かさゆくや月も舞ある天乃道　同

御光御座ハかゝりけなしや宿の月　仲昔

虚もうしも三へをかゝる月の影　定清

聞まつるをとめにとる月や琵琶法師　廣寧

月朋なる文字もや月紙三川の瀬　一和

娘の夜ハ月乃威光やまん鏡　正能

みしたゟめ天下ります水の月　是春

松の葉の影もや月乃かくれ笠　信須

宇治川の月ハわたしの葉船かな　知春

井の月をくみきて影やとれぬ汲人　宗甫

閨乃秋や月の鏡のうらおもて　定行

九日過も出るや名ある三ケの月　宗房

天上の五衰もさそれ月の雲　和好

うす雲ハ御まへや月も光君　元清

旅あまは煙ある明の月かくれ　世耻

九まへをもおのかゝるや月の雲　重以

織つまりの月紙かくせる雲の袖　未近

三さよへて三笠とめした月の影　光行

屋かゝ◯よ櫂まてうゝも月乃舟　知秋

ガラス使用

曇るをも天理といへり秋の月　成政
天道や人をころさぬ月の劔　瑞竹
大小のわかちつけてや月乃劔　同
下として上をたつるや月は酒　道与
負てねやとらん智鈴錫月の友　同
阿かる座に称くろる月や梵楽　正近
くもる夜ハおもしろいもなき月の皃　成次
元来ハ同性なりやその月　同
負にわまく月や雲井にまそはつき　一日
なかめやる月や心乃かよひ舟　替月
月ちらにむかふ入日や金の的　親
同もうかハ世界をとめくる月見かな　髙欵
月の入跡ハ色即是空かな　空存
名にし潮や清くきよむる浦の月　言辰
湯の山に入月や夜と一まハり　道之
撫せねと月や久しからあまね私　重寛
むら風にゆくハ鷁首か月の舟　三信
月の船も北斗やたのむ空の海　河内 正次
行月よなかしハ宿よりやせよ　安静
あらて夜ハ月もみくつく手水かな　貞順
まん月の照や二千里八千里　元政
かさ一つみんなさも万民の月見かな　三成

見あかぬや中にあみかける月は門　伯旨
月影や渚はさすのみと乃濱　保友
水は月や天上天下唯我ゝ海　意朔
西むいてかゝる月見乃始りこそれ　離雲
わしかたにすむや難波のうら見月　経佳
入月のちらくへりする夜半かな　休安
とのくと見る明の月は見るゝ船　延高
むさし野や山乃端におけく月斗　含帝
月影よし立川居川あ川の濱
見るへや雲路にすゝ月は兵　光重
見るかやとゆとかへそよ月乃つね　頼元

月影もわりふましゝ海や船すゝし　後康
天の通ふ亀り下てかゝる水の月　方格
ゆうの戸を操るや月の船あそひ　能之
天川よこはうしゝや月の舟　保之
月と日や人のとそそくひとり酒　易次
車引く水麿すゝかこし月は簾　滑長式
海よくも月見の船やましき座敷　三辰
月は影うくすや雲は袖乃うら　未寛
入月やよらひかゝつく老嵐　正業
うけもちみまつる盃の影もるかな　助音
あらくし白地の扇秋は月　尾州友下

なへて世にしらるゝや月みてもあか　新山 久次

むら雲や月見る扇のすさましし　正信

大人や瑠璃のひかりと水の月　童良

雨すきてや鴫うかれ行月見船　定行

月小雲かゝる家や是も韵すらし　同

月影や是法治うるゝ雷乃庵　立静

家寄りくれ月にかゝるや新法師　宗利

月ハまかりうかる影や草の露　童香

宵の内ハ堀かゝりすか月のかほ　坂村 久忠

春ハ栄花秋ハ栄耀の月見かな　紫語

風うきみのかけをまつよの月

酒のまぬ可盞も空の月　常辰

月や今天下一のたからもの　同

昔よりそハ月も十日ならすかな　同

過し夜の月の名立る朝寝かな　同

むさし野や摺ゝの月見る草の露　同

月や絵師庭木移しも障子紙　亮

雹ふるや雨夜の月の面かはり　嶺利

人影やせいくらへする月の前　同

盞の影りむかふね下戸もなし　同

月うく須雲や俳諧なる人こゝろ　泰重

雲すきハ幕の物見る月の影　宗言

ガラス使用

天道にそへてかはるや月の影　同
入月の簾戸もされ秋乃聲　同
宅曉く見る月もまし月の露　同
月影の志たふ窓やうつりはもの　賚
月待り影もいりせぬ伽まくら　同
月ハ鏡照るや上品蓮臺野　同
天にたゝのしひを何嫁の月　同
影や鏡水まさかてぬ月乃影　同
影にも紙まくらぬ月の香もなし　同
ふもとなる紀月もや妙玄の玉津嶋　定親
鈴鶏といふく雲井の月の嵐　同

洞庭をいうて湖水乃秋の月　同
照月も秋を各別世界なれ　親信
まろの月や雲引きとする五月雨　同
見ぬ名乃簾戸なまめや窓の月　信世
月の秋や櫓てハやゝひくき舟の舍　同
窓の戸をあくるや月の勝るをらね　同
月影り木陰や清いてみさりの松　好孚
秋の卯にゆく月もすゞめる月をらず　同
かゝみくハ孫ゆくらんの月の影　有哉
扇つきゐる明月よ日の御影　親十
見ぬ方をは空ぬきまほしやまろの月　同

ガラス使用

廻文
れうミ見る月はくるゝや御神来　政之

浮きひきは縁めし同かな月ひきは　同

魂紙うきも一目知人そよふ乃月　宗雅

名明ハ夜紙日ふ継やる銘は月　同

わかりしかしまるは月こそ闇の安　同

雲風夜ハ平天和の玉の窓は月　貞立

世の中の月ゆや都の窓灯籠　同

ふし曇れ善悪不二は秋の月　為親

雲や釣うちひてくは月乃影　正朝

まくらたつや枕の月は釼　同

名は秋の月やこゝろ於かくり　同

またなく菱紙見るや月は哥　資方

世にみてる月や其まゝ生佛　同

むさし野の果こそ月は隠里　清卜

天筆の水にも絵紙書池の月　同

名は秋の月や往来並東西　同

恵方は朋のまつるひまつ宮は月　昌房

三ケ月やくらへる男はうなゐ子か　同

秋暮ねと同ふさやうかゝる月見哉　同

さか鉾の舟ノ穂上月乃釼　同

湖にも影すむ月の蛙の飛　同

月の都かむいは高天雲は足　立圃

月の影さしてはまね障子かな　同

山くれ見せる月や琴の絲　同

かつらとや月の鏡のうら乃紋　同

月ハよし川影ハうつまゝに流れ　同

なる瀧の砥山やみかく月の劔　同

月影や直なるもまかる道　同

肉月やまに取くれる孫の文　同

水底乃影ハ名珠の空乃月　同

雲や袋抜さまる月は弓八幡　同

每光はなとる玉乃里乃月　同

ムまくらはゝや月乃兎ぬうし　同

わすれとく扇やなけく空の月　同

夜ありきの身はそよ月やち律　同

名月

雲霧や芋名月のきぬかつき　貞德

名月は高く影うつす天龍寺　同

名月はまるし親や芋かしら　重頼

三光影まうめし月はそ罷れ　同

むまかれは名は末代の秋は月　重一

よむ哥やこよひの月はかくし題　幸和

芋をすとうめいは三五は月夜哉　西武

おなもさしえにはまうひそ月は顔　貞室
名に高き月のかゝやく七多羅樹　同
一とせのかけやまろめてもち月夜　同
歌見しま名のゝ花は夜半の月　知德
名もかはれ月も源氏か雲かくれ　同
月は名やこよひの宵は宵まつり　同
たゝよむも今宵は月の名所かな　同
称くみもやまも名も月はさし枕　家重
名月乃夜ハおもへの日納かな　正直
むさし野ハ名にはなる明ろ秋の月　重供
うき月は龍の今夜の日の光　昌意
毎は見今宵の月や芋洗ひ　保友
英たりきれば
名の紙なりけすゞめは月やうつら舟　定清
まち月や光源氏は大かゝみ　白云
月かゝ浪水まさき雲や名取川　一日
名つけゝる月は江船や世界丸　塵哉
是天の名酒なるらんやまとよの月　信良
名月は宗に心やとまりけ　元清
名月や今年くれは初田面　正辰
名月や日本一乃奇は題　正安
似すもあらん似もせぬなからの宵月　多翁
名空と捨つゝ月を丸くさう　可々

藻塩の竈中や鐘も月の秋　好道

名月の夜ハ聖人か夢もなし　千田 長之

名月の影やうつろの池の水　昌治

何丸といふ名をも今宵月の船　重良

月の名や所々によらね一天下　同

今宵名を給月にひろへ根芋や　是雲

名に見えん心の図もこれ月ハ月の客　同

丸くれと名や吉方に志ろちよの月　貞知

こよひこそ月ハ不の名ぬし哉　愛仙

名ハ上の名の影ハ満月菩薩なれ　久閑

笠の内見えんハおゆるしちよの月　小泉 忠弘

名所とハ今宵の月後やこゝろ　久恵

月の名ハ世々の奇の作者かな　定行

二千里の内のこよひハ月見かれ　重澄

富貴の庭や安楽の上の月　[illegible] 由信

晴るゝこそ月ハ名すけ宵の雨　定治

まるめの粉も今やむくらん望月哉　保友

名をめてゝこよひ捨いつくし月夜　重周

丸の内のあそひハ千年の月の宴　三辰

名ハふるひ影あたらしやちよの月　池田 長式

今宵ぬるゝハ月のさかりや竹まれさこ　嶺利

名らく思ふこよひの月や他心通　玄元

ガラス使用

月は名やあまよひの秋絵をかへり親　定親

善悪の名こそうましや月は雲　季言

秋津洲は名ある瀟湘や宅乃月　春童

末代も名やはかりあまき月一夜　信世

圀くもりし今宵と月の名ありかな　同

名ハむかし源氏の巻乃秋は月　親平

名月紙うつしそむる色かな　好女

粗すゝや詩より酒よりまつは月　好孚

閨こそいへる毎夜月乃鏡　同

名は高し撲たるいへ宅乃月　家雅

饒なるは内侍所よき夜の月　同

うたゝねと三五夜月の光かな　尚之

月ハあれど宵をむかしねとこゝか　清甫

名月やむかしかたりは奇乃女　未知

塲晴てよりくし名ハ何宅の月　生童

名高きさへ瀟郷もいふに月は鏡　友貞

名に流のあらぬひかりや月の鏡　同

名のりいへる月をすゝりや次戸の窓　同

名ハ高し見る目ハひくし水は月　常辰

高き名は浮や煙める月乃宅　同

名や人の口よりもかる月は雲　同

夏飢名みいたく湖よ多は月　同

新敷名やお草紙やこの月　同
高き名やこよひの海にくる月　同
歌は花親とぞ名や秋の月　昌房
くもりなし月まつや今宵親所伝　同
中庸の道あきらけし旅の月　同
日域も秋こし一夜や月支国　立圃
月くれは日下よこよひ月天子　同
名に高紀月やよさは天一位　同
晴役の名残露すませ空の月　同
気晴くは風新月の雲もなし　同
清水の名ある本地や室の月　同
月影は十分盃かさね乃夜　同
名にいはく上戸の月や三五郎　同
絵師もやはこよひの月のかんまはし　同
見紙あんみ月の字紙又る夕家　同
誰もこよひ月に心や有頂天　同
太鼓かとれこよひてきく天の月　同
新の字紙恭例の名にや秋の月　同
明後夜の月の名や関居ひとし　同
出給人いさよひの為の月乃出　同
御縁何是月はたちまち此の夜　同
かし縁の月のひかりやさし枕　同

おもしろかりしの月やいまも氣か　同
名の月の度(たび)かさなるや丸づくし　同

九月十三夜

着(き)て出(で)るや月も宝(たから)の市女笠
十三や内菊(きく)さかりの月の影(かげ)
今宵(こよひ)こそ月のうつりやまめ板こ　氏吉
月もこよひ十三仏(ぶつ)の光かゝれ　貞室
大豆(まめ)の名の月は七歩(ちほ)の才(さい)かな　同
月も市乃母ゝ汲てし波の紋　李吟
名は紙もえ人数(かず)ともなし月の客　玄隆
後言や先(づ)月とうる夜の市　友静
月弓の名や二度のたんやと矢　定行
二度の名の月ハ車の両輪(りやうわ)かな　幸和
今夕の名の月や心ぞ勧持品(くわんぢほん)　和年
名ハひとつ無二(むに)亦(やく)無三(むさん)室の月　親信
月ハ一河名こそ二河よかそ人方　随世
月の名をこうよひや文のあし書　同
十三やまさ小学(やがて)の窓(まど)の月　井上友貞
弓竹(かこだけ)のふしもや月の十三夜　正朝
名月よかされね言葉(ことば)の命もう那　親平
後悔(こうくわい)ハさきの月見ぞこうひれ　同

かりの名はうつりね月や十三夜　政之
二千里を過る月はうしろかな　同
丸さとしいはゞ残さんやおとの月　重澄
名ハ二川峰の一字や空は月　同
廻文に作と先乃名をと免の月　同
姫月の名残二つまとはるつらね　親安
根元ハ水栗かまへや月の名　孝要
名乃字と書はもりや後乃月　宗言
かぞへ給月はなや十ゞ三ツの山　常辰
月の名のみいそくあまひや親の菊　同
蜜も栗やらまひの月は御心許　同
いが栗の雲にかくめるまどの月　同
月は名残後撰集しやたへん哉　友貞
栗かりそ十日過てはこゝは月　同
二度の名は月や和光乃稀同を　昌房
栗ともまめいつも名の字その月　同
名のみ高紀後漢は三代やまた月　同
名月と文めい月やいとこ浅き　立圃
ふりこしや栗名月は口すさひ　同
此月のまへや望はかのえ申　同
名のりなへハなとやまてたは秋の月　同
名月はもゝやまたけりの栗は不　同

黄雲ハまた名月ぞ光かな　同

駒迎

月ハくさ夜やすゝきれ駒むかへ　輝隆
雲雀毛や雲井にあかる駒迎　重香
甲斐からひくいさむや黒の駒迎　厚成

雁

よつ親ハ其まゝ雁れと孫字かな　惟貞
陣出せよまとゐもしらぬ天津雁　玄康
かんかゝとねすてみゆる夜寒かな　一正
鴈ハ文字たかよや霧のめんかまき　季吟
かくひとり語尾か鴈や礫文字　茂哉
五鴈も厄りハ不立文字かな　仲昔
とくへさき歌とかりの芦まかな　宗房
能筆かいまくもうつく鴈の文字　永弓
誤字雁や金まけところく六字かな　正重
雁迎やこまうと墨かの文字　如貞
青天ゟはつかする鴈の書し文字　慈福
空の海わたる雁字や大師流　昌長
夜の明けハ浪きよく鴈の帆かけ舩　角女
棹なつくかけるなかしハ天津鴈　重因

ガラス使用

かゝりは文字両の翅や扇なゝり　親信
小みゝさゝやきまろ雁や一文字　方孝
ゑみ事やといつや絵み書人の跡　玄悳
白雁や寒石なりの文字乃いろ　信世
國しへもろいかりの使哉　宗言
白雁も浪にうかるや腹まくら　嶺利
月は舩のさわみなれし初雁　立圃
孤雁乃絵や目かけの筆の跡　同
雁門の天の戸ひらくや坂の越　同

碪

あてに幕擣つらくおきあさうかな　芳友
山彦は答や碪乃いきひやし　貞室
ゐあてみらしこゝやうらんかくしこを　慶哉
もすきひかりて家ぬ月の下　重頼
月くらき夜は閨中のきぬたかれ　宗畔
かゝ衣旅らけせされぬけ拍子　宗之
聞くに打く我ねよしろもうかな　誠成
ねらぬはよくうて蝉のうきゝを　重以
未練猶うちても名は碪かな　宗立
山彦のおもひ槌紙打きぬたかれ　定成
ゆまうしもおきり拍子の碪かな　玄玖

遊君のうはやきぬきぬの白拍子　忠親

風の手や砧のうちのたえらるゝ　資

これもまたうハかの縁ぞ恋衣　同

たゝらこハみゆる紋のきぬさら那　立圃

菌

稲しおもハ岩茸ともなり小松茸　重定

松茸や色めども香は汁の妻　玖也

山守がたくみのまゝに来る茸　政公

舞茸や松茸がもの隠し笠　信重

これもみよ世の隠れん小松茸

木葉にも香やハかくさぬ小松茸　村宗甫

鶴のかりなれ松茸やかくれ笠

茸かるやいくらかのそのすゝのこり　立圃

小山の茸かわハ汚ぞ小松茸　同

楓

爪紅に染ざすや楓の村紅葉　良春

しらうゝ色めやとのゝかえての深　龍之

非情まふかしうき色やかえての木　立圃

紅葉 付 名木紅葉

水の絞染にかけし露の紅葉かな　休甫
山姫の赤まへたれや下もみぢ　重時
酒や時雨のみこしもみぢハ人の顔　貞徳
緑と醉絞さしつる色にの梅紅葉　同
かまの色かのくわし楓紅葉　同
露の後霜乃紅葉や二重そめん　政昌
源氏酒より醉しや冬ハ紅葉の賀　幸和
玉垣乃冬ハ丹ありのもみぢかな　同
錦木とこれや申さん山もみぢ　同
草ハ名乃紅葉や山乃ひらり梅　宗壽
羽二重ハ時雨のそめねもみぢかな　定門
奥露ともうす中なしね紅葉かれ　重頼
わきもいへもみるや錦の下紅葉　同
先かけや我慢高雄の紅葉狩　同
稲荷山きつね色めもやうす枝　可雲
源山乃もみぢハ闇の錦かな　重良
おしもみに岸の紅葉や立田川　定行
和國小色かうく達る井の紅葉かな　和年
染くまりる時雨やあゑゝ下紅葉　和州 正信
紅葉する山ハ一しきふしきうかな　忠世
世中の人さこれとやこいもみぢ　盛三
さたとこそ冬紛ぬめや紅葉狩　常辰

紅葉しれそれからにする我日かな　常言
もみちせんやぬれともしらぬ一時雨　友貞
多欲ハこゝろの影かもみちかり　親信
うきゝわかなめやかしもれんとし　同
川急り紙ちうハ紅葉の錦かな　有哉
かつらきも数ハ高雄のもみちかな　寺田 政之
今織のおしきなりけり錦もみち　宗雅
山川紙漉むもみちやたつたより　參之
よひ内みあらしハ何紙ちらち様　知徳
実ともめや一事両稲様もみち　瑞竹
あかぬりれいろか漆乃とす紅葉　但秀
年ふ二度花や櫻れた川紅葉　龍之
ちよ様も葉ハ數しろ枝かな　直之
非様れみしきの帳かむ色紅葉　定親
ちる色めろハ百千万れいろはかな　良徳
ちりぬれも山もあきれのいろとかな　正信
行く山ハ冬よこえてくるいろはかれ　同
まろゝねとかられも露ふいろもかな　道二
移ら紅をといそん木末の時雨かれ　由氏
七葉の楓ハちりいろとしかな　重貞
まするひにうく小野山れいろはかな　交云
大師まり本ゝれいろゝとはしめかな　信元

ちりぬるをわかの種（たね）なるいろは哉　知徳
ちりぬるは落字（らくじ）といはんいろはうた　忠利
いろはにほやまなんて咲ふなるかし　季吟
難波津（なにはづ）は手ならふ梅の色葉（いろは）哉　一重
色葉もやちりつもりてハやまとうた　棘口
白うして秋はあれそしく色葉かな　泰重
時雨こそ本の染（そめ）衣（ころも）の色なりけし　三辰
色（いろ）ゑるり紅（に）そめて散紅葉（ちりもみぢ）かな　由信
いろくは松は緑恵の鏡（かゞみ）かな　昌房
花よりも猶（なほ）紅梅は葉色（いろし）かな　同
御（ご）詠（ゑい）哥（か）はぬさや手向（たむけ）ん楓紅葉　同

似（に）せハうつる錦の紫も本（もと）末の色　同
葉も同じ紅模様よ秋の色　立圃
ちりぬるをかくハかえてハいろはうた　同
秋の猶（なを）ひかの染しもす紅葉山　同

野山色（のやまのいろ）

山はいろは緑あるよさすや二字深　親信
いろは迄うつりし山の夕日影　政長
山は錦（にしき）もとゞる岩（たけ）さ夜（よ）は白妙（しろたへ）　就武
周防灘にて
山の色うつるや似（に）せもうかるゝ　末安

ガラス使用

重陽 付菊

余所までもさそはれけりや菊乃花
置霜やのろくはまや菊は露　氏朝
くむ人もありそなたや菊の水　宗祐
摘のこせ又こう菊は花乃宿　同
ぬしつおゆせきに菊酒は匂ひかな　宗富
七重八重一重や菊は十六重　同
金銀のいさごか籬乃菊は露　吉久
沈絡はくりんを匂ひは菊座かな　同
わかハちゝよ白きハそよや翁草　以董
朝露のちるまやたゝつもと翁草　惟貞

わりくさくこらよ目貫は菊の花　宗明
淵となすうや苔有るくの菊は淵
潯陽の江か得くは菊のかち
命そとうへ置さくや守り星
をよさくは九曜の星か菊乃花　貞室
乳ぶれよ世は楊貴妃の菊は酒　昌意
人くれ無理作りて菊の淵　弘永
菊酒乃下戸と上戸は淵瀬かな　秀重
廻文
菊は名はそさてわさを花乃くき　養節
九献とは名よの云菊や菊は酒　知徳
根からこそよ花こそちらめ菊畠　同

八重一重九日にさけくさの花　重成

酌そめてけふさねハ淵か菊の酒　友正

かゝくねハ北斗の星かきく乃宿　信元

長いきの九薬なれや菊の露　一日

廻文
かうしさく椙菊のくきの菊さしうか　倶秀

わすれ草所千代まて浮世の中　宗之

せんさいに立ならふ菊やおきな草　氏吉

月やとれとハねまき鷺の菊乃露　催笑

恥よきく松のしうん露いくと　福井　重昌

滝の音ハ名にこそなかれて菊の酒　致也

ねまきてそ右かくおりへ不菊の酒　宣安

花の香や茶ゝ椙の菊乃酒　成安

ねまつく月もや山路の菊の酒袋　吉章

十六重さくや源氏のとまめ花　季吟

うけつやもよ十楽のたまる草　家信

よその菊や皆揮ゝ乃酒の友　是雲

ねまき鷺乃ゑふハ長鷺や菊のもか　林　宗甫

千世も菊んこる袖匂ふさくの酒　笑楽

なまかふりきる星のとく菊のえん　重頼

さくらくもまもやちゝに翁草　光任

白菊ハ伽羅の名外あふかりかれ　同

菊水のなかれも寸急の芸佐かな　好安

日は緋の深みにせり菊乃露　琢女

色好むひとのきぬや菊の紋　方女

長乃秋もこれまてハへしこかね菊　長妾

さかつきに詠や付さし菊の酒　常辰

心根のえて葉とおもうや菊の酒　同

苔のむす千世のためしや菊目石　同

酔さめからけり行菊の花の露　巖利

百薬のうへもなかりし菊乃酒　同

しもすゑの露や廻文菊のくき　蜜言

太白ハ砂糖乃おちる菊乃露　同

さかつきハ唐やたゝへて菊の淵　同

誰か淵にまけぬかつきを菊の露　友貞

きせ綿やふたり菊の酒乃酔　同

かけし酒やきよ九日の菊さかん　同

うつる菊もなつや発句の表向　同

香有る菊や深菊のむかし酒　同

秋ありくあきさすれ抛や菊のむ　滿直

百葉の艶とまつめやさく花の酒　同

香にほへて菊の酒にハ下戸上戸　同

菊の名ハよりくゝる紀の名や福寿海　定親

十種香を何の薗の菊乃花　同

そこぬけのよ上戸やいたく菊の淵　信世

ガラス使用

大白の揚よそのえや菊乃酒　同
渕と瀬のかはりや菊のえひさき　政之
咲菊乃縁や今く百花香　好与
百薬は数とかせなれ菊の酒　逸立
大白り多こそ菊の中わひるか　同
盃は小袖をまつや菊かさね　正朝
仙人もいろみぬきりや菊の花　同
さかねまいは青淵よりやさく菊の露　同
行やとてみんと連驚し川山路草　同
袖の香やこかれ幸菊の露　清下
星の情くもにとかるかや菊の枝　同
客人や山人ありせん宿乃菊　昌房
花の兄と種かはりけり萱草　同
美女着の見升し星やこかね菊　同
濫觴のなかれは露か菊の淵　同
いろかはりか野菊の露や小こかね酒　同
残菊の匂ひや酒の二日ゑひ　同
今山か蘭と猶化乃菊のいろ　同
養老の瀧つかなかし菊の淵　同
千秋あらしきねや菊の友　立圃
菊とくむなかれも縁や花の宴　同
ませ垣は菊のかはりのませこかな　同

つむ袖乃ゆかりハ玉か菊の香　同
香りね世ハゆへしそおりませの菊　同
よわくハ酒發達よ臺乃きく　同
尽せねハ天乃こうんりか菊ハ露　同
重陽ハ酒こそ菊の作り代　同
ね世於つゝあいて高縁か菊の香　同
もうさんや花瓶とるゝ菊乃酒　同
盃や小袖も移さしね世つん菊よ　同

紅葉鮒

採綱りこハまことゝをり紅葉鮒　貞徳
山海乃珍物なまこやもみぢ鮒　同
酒ならねうみに酔てや紅葉鮒　德元
汁にせしものか名をとゝも紅鮒　長吉
水底ハ蜀乃錦かもみぢ鮒　昌意
も随分に手向んねさや紅葉鮒　定時
ひさひハねつみ釣河へよ紅葉鮒　重頼
御膳にも鮒や調する紅葉の賀　方成
浪に鮒ア房りなるや花もみぢ　定重
料理せハかくこそ秋のもみぢ鮒　式是
酔とさすハ紅か膾の紅葉鮒　但秀
うかゝに秋のいろゝや紅葉鮒

これも又水生木やもみち鮒　家房

波乃花ちりまかふや枝鮒　江戸 貞宣

細れてもやとふかしきかゝる紅葉鮒　朝次

湖の中や緑なんもみち鮒　次炭

木すゑよりも紅葉ふらんとせん鮒もがな　正朝

枝折や水をいけどれ紅葉鮒　政之

木よりも根山かもやされもみち鮒　常辰

しらけたる波ぬいろこや紅葉鮒　昌房

呼からう川瀬の鮒や紅葉鮒　立圃

木實（きのみ）

木の実まて色をのぼりて白樽　家宏

木すゑより落てもとのまゝ柚ひしほ　幸和

かきくけこくるそてさいそたちつてと　貞徳

廻文
多人のさかよしや柿の実さ　清成

椎拾ふや右のおもてにまき　一恵

心なき身にも秋なきこゆくしらか　貞盛

五位鷺のかくしいとなみ木の実かな　求与

いかよりもくり鍵まいるすや猿のちから　私言

かちくちさそくりかりの谷の底　普笑

木の実さへ又いりや丹波栗　信元

むかしはらう栗の二子や婦いりと　重礼

山猿(やまざる)もくるかすりに蚤(のみ)いちかうな
耳きゝ(みゝきゝ)味蜜(はちみつ)のくるかや椋(うき)の本(もと)　常之
花よりもみまひたくるや苦松桜(にがざくら)　林康
秋みんくも久しくなりね姫くるゝ　宗立
秋よりや末は葉みゆ円座(ゑんざ)椋(うき)　意朔
伊賀(いが)おつる絵いそみ西え丹波栗(たんばぐり)　重山
人心空(そら)ふきもなすかや木練(こねり)うき
花よりは栗(くり)もいけそや砂(すな)のね　廣通
節くしてや大きにやつく大和椋(やまとうき)　志賀 後安
よる人は古鏡(こきやう)やうつる椋(うき)の本(もと)　好子
御衣(にしき)椋(うき)絵う人は雲井(くもゐ)の庭木(にはとき)哉　同

よかくれ鹿(しし)ぞおちつくに熟柿(じゆくし)椋か　昌房
假桐(けぎり)せんとのゝ木なるよ姫くるゝ　同
（のゝ字一向はすむべし入のきく）しく事れなくしめや椋(うき)の角さ氷皮(かはし)　立圃
し敷や邨(このきく)のこゑとろりのこゑと　同

秋田(あきのた)

かるねるまはゑてれめくらひの山田(やまだ)かれ　徳元
長いやそてえん絵(ゑど)きそかり田哉　氏重
孕(はらみ)しろ稲(いね)もそ緒(ゑお)のたしし出穂　玄旨
もみ出(で)しで縁(ゑん)つは小田の捨(すて)ひ入か　ノ身
鳥をとれ小田(おだ)は穂(ほ)よかれなるこ哉　宗信

ガラス使用

ちる雨もしまさや庄屋の一番子　栄之

ひえ畠をまもる僧都や山おろし　順忠

ほさしとてまけれねうちくやわさ栗　正信

旋風や男と組て吹まさねくさ　重昌

弓矢もはり小田の僧都や法師武者　昌把

大風の吹手あまさに奪ゝれ　常倫

とのつゝる日ハ焼米の稲種かな　嶺利

秋乃田や作の貢の御めくみ　常辰

殺生す一郷なる山田の僧都かな　立圃

九月盡

手向山錦や秋の名こりやけ　康吉

秋の行衛みえぬや九月尽の闇

大暮れ秋さへ帯よハ小暮れ哉　立圃

雑秋

旋風にましやうしと打かしハ哉　幸和

男にしむや香炉の烟秋乃風　徳元

芦乃穂ハ人を招けるま蘇枋かれ　鰹栄

なわらをも名をそ色かまれさん袋　三直

すらの心ある人乃酌新酒かな　厚成

花よりもましや吉野の葛団子　貞徳

ガラス使用

秋風やうら焼くる葛か原　友春

下よりや敬ひ祭る上御霊　知德

祭ある所や京の上御霊　同

秋風に腰すりよる木賊かな　玄志

いつまてか旅纏えくも秋茄子　二道

よろ年の行しくもほろゝ秋茄子　親宣

鳥肌の身やあたゝむる玉子酒　三辰

草まし木も表る秋や盛衰記　義久

釣鐘の音はいうそ寂し秋さゆるかな　亩 正辰

一とひの羽やのせ秋の日の鶉　重良

旅の日や世のすゝりし乃蝸の髭　信親

村人の草いつまうり秋だり粟の餅　常信

その原の木織みうさの露乃玉　吉沢 満長

鴫やさいうそ鳥なつし秋茄子　嶺利

人の身や鳥肌かゑん秋の風　同

盂蘭盆の礼八十方旦那かれ　常辰

廻文

菊の菊うや岸り八軸柳の菊　同

秋風の口みされ世り窓障子　好孚

粉挽しみまれや人の赤き色　同

水乃精のうつろます濤の蛙かな　友貞

住の江の市乃さうしや貝の色　同

茸さゆる秋の霜もゆ落乃銘　正朝

ガラス使用

別 3
3
5
3.682

夏の日は影（かげ）ハ一寸（いつすん）法師（ほうし）なれ　立圃

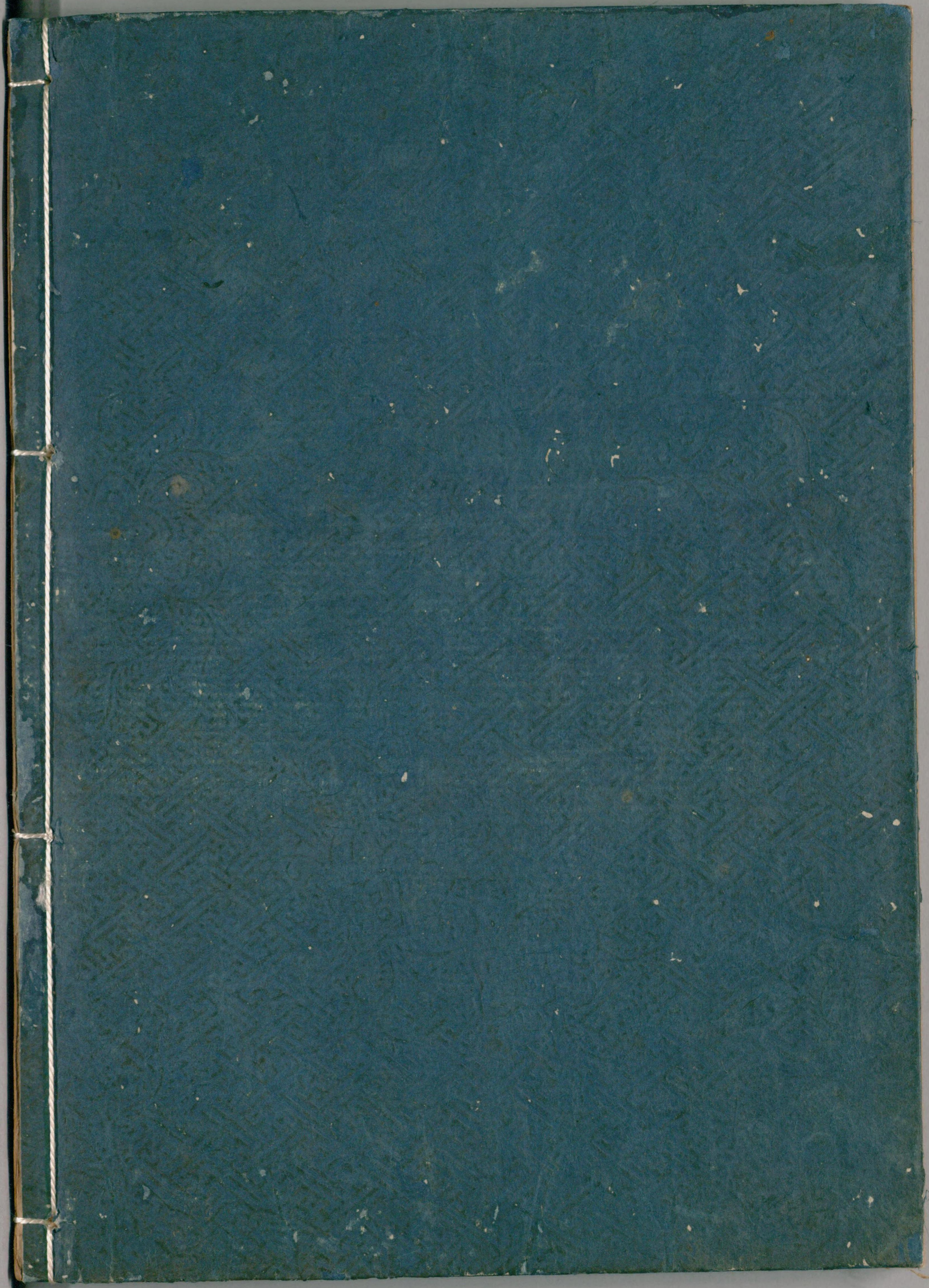
秋乃日ハ一そく歩ミ西ひかし　同

大正
13. 5. 14
購求

旭巣文庫

27. 8. 28

ガラス使用



ガラス使用